

平成28年7月28日、市長と政策秘書課職員の話です。

子牛の通った小道

先日、民間に勤める若者と話す機会があり、「一度、始めたら止めることができない」「おかしいと疑問があっても、変えることができない」という悩みを聞きました。

その若者たちに、私は、アメリカの詩人サム・ウォルター・フォス(1858-1911)の「子牛の通った小道」の話をさせてもらいました。

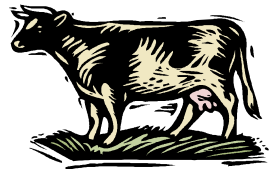
ある日、草原を一匹の子牛が気まぐれに散歩していた。くねくね曲がりながらその野原を通っていった。

あくる日、鹿が狩人に追われ、子牛の通った草がねているあとを逃げていった。その次の日は羊が、その小道を通った。その後、多くの動物や人々が、この曲がりくねった小道を「くねくね曲がっている」と不平を言いながら通っていった。

やがて、小道は大通りになった。またたくうちに、そこは大都会の中心になった。何十万人もの人々が、今もなお、300年もの昔に通った、あの子牛に導かれて、くねくねと曲がりながら通っていく。

確固たる前例なるものは、こんなにまでも尊ばれるのだ。

みなさんにも、ただ、何となく始めたこと、偶然始まったことでも、延々と続くと、「変えられない、止められない」という経験があるのではないのでしょうか。



私は、若者たちに「重大そうに見えることでも、ことの始まりは、『子牛が偶然、通った』くらいのもものも多い。自分達に『こうしたい!』という思いがあるならば、勇気を持って、仕組みを変えたらどうだ。そのために、関係者で話し合ったらどうだ」と伝えました。同時に、「自分の仕事を良くしていきたい」と悩んでいる若者を心強く思いました。

この話をしたときに、私が市長に就任した際、市役所で当時の部長たちに、この「子牛の通った小道」を例に出し、「これまでやってきたことを見直そう」、「笑顔であいさつをして、市民の目を見て話を聞くことをしよう」「私たち市職員が変われば、市民も変わる」と話したことを思い出しました。

平成27年国勢調査の速報値で、全国の約8割の自治体で人口が減少していると発表されました。全国の多くの自治体が、生き残りをかけ、行政も市民も知恵を絞っています。初めての人口減少社会においては、何がその解決策なのか誰も分かりません。

前例の踏襲ではなく、思い切って発想を変える勇気を持つことが必要なのです。

～市長の話聞いて～

私自身、「どうしてこの道は曲がりくねっているのか」と疑問や不満に思いながらも、変えてみようと動くことは、少ないです。でも最近、疑問に思ったら、「ねえ、ねえ、ちょっと変だと思わない？」と隣の人に聞いてみることで、変わるきっかけが生まれるかもしれないと思っています。ただし、そのとき、「変だよな」という事実だけでなく、「こうしたら良くなる」「私ならこうする」という提案を付け足すことが大切だと感じています。

最近、参加した講演会の事例発表で、「〇〇しかできない」ではなく、「〇〇ならできる」と言い換えるだけで、その人に役割が生まれるという発表を聞きました。こうした些細な言い回し一つからも、人は変われるのだと感じています。